名古屋グランパス賞（中学生の部）

大切な人を失うということ

東栄町立東栄中学校　一年　佐々木（ささき）　佑太朗（ゆうたろう）

平成二十九年二月九日、僕が小学校四年生のとき、僕の生活は大きく変わった。

学校から祖母の家へいつものように帰っていた。六時のバスで祖母の家の前を通るとき、母と祖母が道端で待っているのが見えた。今日は祖母だけでなく、母さんもいる。うれしいと思った。バスから降りると母がギュッとだきしめて

「お帰り。」

と言ってくれた。とてもうれしかった。

そんな幸せをかみしめていたときだった。祖母は夕食のしたくをしようと一足先に家に向かって歩いていた。突然、「ガッシャーン」と大きな音がした。祖母が車にはねられた。僕は、何がどうなっているのかがわからなかった。目の前で起きていることを理解しようにも、まったく理解できなかった。僕は、頭が真っ白になっていた。祖母が道に、たおれている。母が祖母にたくさん呼びかけていた。

「お母さん、佑太朗とさくらがここにいるよ。わかる?」

母がその言葉を伝えたとき、祖母は小さくうなずいた。

母が必死に救急車を呼んでいるとき、僕は何もできずにいた。近所の大人の人が僕を落ちつかせようと近くにいてくれた。僕はだんだんと目の前で起こったことが少しずつわかってきた。そして、とっさに、

「救急車早く来い!バカヤロー!」

と大声でさけんで泣いていた。しばらくして、ようやく救急車が大きな音をならして到着した。母は祖母と救急車に乗って行った。僕は何度も生きていてほしいと願っていた。

僕は父といっしょに後から病院へ向かった。祖母は処置室に運ばれて治療が始まっていた。病院の中は、先生や看護師さんがあわただしく動いていた。祖母が大変なときだったが、

みんなが祖母の命を助けるために熱心に動いてくれていることがうれしかった。僕は、祖母はそんな簡単に死なないと思っていたので、あわただしく動いていても、どこか安心して見ていた。ところが一時間ぐらい過ぎたとき、祖母の命はもう助からないことを先生に告げられた。

僕が祖母と面会できたのは、祖母が死んだあとだった。祖母を目の前にしてもなんで死んだのか意味がわからない。祖母を見つめると、にっこりと笑っているようなのに。僕の大切な祖母が天国に行ってしまった。

もう夜も遅かったので、親せきのおじさんと祖母の家に帰った。祖母がしたくをしてくれていた夕食を食べた。味ははっきりと覚えていないが、とにかくおいしかった。その日は祖母の布団で寝た。祖母のにおいがする布団だった。

僕の大切な祖母がいなくなり、僕の中から大事なものがするりと抜け落ちてしまった。まったくやる気も出てこない。たった一瞬のできごとが何もかもを変えてしまった。

僕はしばらくの間、いらいらしたり悲しくなったりした。祖母を事故にまきこんだ人がにくくてしかたがなかった。なんでもっと安全運転してくれなかったのか、なんでもっとよけてブレーキをかけてくれなかったのか。それができていたら祖母は助かっていたかもしれないのに。事故を起こした運転手に対するにくい気持ちばかりでてくる。実際に、祖母をはねた人は、前をよく見て運転をしていなかった。運転中のちょっとした気のゆるみが祖母の命をうばってしまったのだ。

祖母の事故から日がたち、だんだんと元気を取り戻すことができるようになった。すると、祖母の事故を起こした運転手について考えられるようになった。僕が大切な家族のことで悲しんでいるように、運転手にも家庭がいて、悲しい思いをしているのではないだろうか。これから先、きっと僕は運転手を許すことはないと思う。でも、運転手の家族が悲しい思いをしてほしくないなと思った。きっとこれからも車に乗る生活をすると思う。もうこれ以上悲しいことが起きないように、安全運転を必ずしてほしい。僕は祖母の事故を起こした運転手にそう願い続けていく。

僕たち家族は、事故の瞬間から今までの当たり前の生活がなくなり、祖母がいない新しい生活を歩いている。まだ祖母がいなくて悲しいと思い出すこともある。けれども、祖母が僕の姿を見て悲しむといけないから、僕も少しずつ変わりたい。今の僕にできることはそんなに多くない。でも、今できることから意識していきたい。日頃から安全に気をつけて生活したい。友達が危なかったら注意できるようになりたい。僕が将来、運転するようになったら、僕のせいで悲しい思いを作らないようにしたい。そんな僕になれれば、きっと天国の祖母も笑ってよろこんでくれると思う。